

【論文】

参加型博物館に関する考察
—琵琶湖博物館を材料として—

On the museum in which all people can
participate and exchange information

布谷 知夫*
Tomoo NUNOTANI

1 問題の設定

生涯教育の時代をむかえ、博物館には従来からの社会的な役割に加えて、新たに生涯学習機関としての役割が強く求められるようになってきた。もとより博物館とは社会教育機関であり同時に研究機関であるという本来的な位置付けが与えられており、博物館の社会的な位置付けについてはさまざまな議論が続けられている。しかしこれまでの議論では、博物館を管理する立場から見て博物館とは何か、という議論が行われる例が多く、利用者の立場から見た議論が余りなされていなかったのではないと思われる。

そのような議論はすでに榊原聖文 (1992) が日本の博物館学の議論を整理をする中で「博物館利用者の顔が見えてこない」と指摘しており、例えばこの博物館学雑誌に掲載されてきた歴代の論文においても、博物館利用者が展示や日常の活動に参加することを論じたものは、布村昇 (1980) と浜口哲一・他 (1977) などと非常に少ない事は明らかである。

ところが、近年の博物館界でよく使われるようになっていく用語として「参加型博物館」があげられる。この参加型博物館という用語は、現在の博物館への期待とよくイメージが一致しているため、ここ数年間に新たに開館し、あるいはリニューアルをした博物館で「参加型」をうたわない博物館はないのではないと思われるほどである。

しかしながら、その「参加型」の中身を見ると、それは博物館界として共通した認識が存在するわけではなく、個々の博物館ごとにそれぞれがイメージする博物館の運営形態があり、それを「参加型」と名付けているというのが現状である。したがってその内容は、展示を触ることができる、ということなことから、展示室内の公開ワークショップの開催等、さまざまである。

博物館における参加型という概念については、現在のところまったく議論がされていないといっても過言ではないであろう。例えば最近の博物館学の教科書を意図して作られたと見られる文献を見ると、「博物館ハンドブック」(1990)では、利用者との係わりについては「市民とのコミュニケーション」という項目で博物館が行うワークショップ等について論じているのみで、参加型という用語やそれに類する内容は扱われていない。また「博物館学教程」(1997)においては、参加型という用語については、展示の項目の中で参加型の展示が増えてきている事が論じられているのみであり、内容的にも触れられていない。「ミュージアムマネジメント」(1996)では、角野幸博と高田公理が利用者の視点での報告、浜口哲一が博物館の事業の中での利用者について論じているが、全体としては博物館における参加型についての議論はされていない。新編博物館学 (1997)においても、博物館にかかわる事項について詳細な

*滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員

記述がなされているが、利用者側の視点については書かれていない。

いくつか行なわれている議論は、展示を体験学習の場として位置付けるものである。例えば高井芳昭(1988)などでは単に展示を見るということから、展示物と人との境を取り除くという視点で、さまざまな体験学習のプログラムの実施について論じ、あるいは大村和男(1994)は体験学習の発展型として、参加体験型ミュージアムと名づけて展示室内でも体験を重視する展示について論じている。

博物館における参加性ということは、博物館の現場あるいは設置者である行政がその言葉のムードを選択して使用しているように思われる。しかしながら博物館における参加型についての議論は、従来の博物館学で主として議論がされてきた内容が、博物館運営のあるべき姿はどの様なものであるかということであったのに対して、利用者の視点を持って博物館の運営を吟味しなめするという点を中心的に含むという点において、今後の博物館学の議論の中で、非常に重要な課題と位置付けられるものであると考える。

2 博物館における参加型活動の位置付け

滋賀県立琵琶湖博物館は、1996年10月20日に開館した比較的新しい博物館であり、開館準備期間中から参加型の博物館作りを基本理念の中心においてきた。そして開館以後、新聞や雑誌等でも参加型の博物館として紹介がされる事が多い。例えば、柴田勝重(1997)は、世界各地の博物館の最近の動向を、環境問題の展示とハンズオン展示であるとした上で、「日本も参加型博物館登場」という小タイトルで琵琶湖博物館を取り上げて紹介している。しかし、この紹介の内容が、参加型博物館と銘打ちながらも「見るだけ展示から見学者もその中に入り込んで何かを起こそうとしている」展示として紹介されている事は象徴的であると考ええる。

すなわち、参加型という用語は、ここでは展示においてハンズオンであり、あるいは一緒に考える事を目指した展示をもっている博物館というような意味合いで使われているのである。参加型という用語は、博物館利用者の立場で博物館について考えるための用語になり得るものであると指摘したが、今の

ところは展示のみに関する使い方がされているということである。

しかし、琵琶湖博物館ではこの参加型という用語を、展示ではなく、日常の博物館活動における活動姿勢としてとらえてきた。すなわち博物館が単なる展示施設ではないことは明らかであるように、博物館の活動理念も当然の事として展示ではなく、博物館活動全体で評価し、表現すべきと考えるのである。

例えば博物館の機能において、研究をどう位置付けるのか、あるいは博物館の四つの事業の関連性については、博物館学の中ではさまざまに議論がされてきている。研究においては、研究を大学や研究施設にまかせて、博物館はその成果をいかす場とすべきという意見は根づよくあったが、新井重三(1973)や千地万造(1978)などで博物館の研究の位置付けはすでに明らかになっている。千地は「研究調査は収集・保管・教育の諸機能とともに備えなければならない基本的な機能と考えなければならない」「調査研究と資料収集との関係はともにからみ合って機能するものであり、収集機能がまず働いて、調査研究機能がそれに付随するのではなく、むしろ基本的には調査研究の産物として資料が収集され、その結果がさらに次の段階の資料収集にひきつがれてゆくものである」としている。

また博物館の機能についても個々の事業を独立的に行われてきた傾向がある事に対して、例えば加藤有次(1977)は博物館の機能は互いに相関性を持っているとしたうえで「そのひとつの機能でも活動不能になると、特殊な博物館として存在する事になるか、または博物館の全機能を喪失することになるかの危険性もある」としており、また倉田公裕(1979)も、「これまでの博物館学では博物館活動を構成する個々の要素を独立した単位とみて、これを寄せ集め、複雑な構成体を構築して行くと見てきたのではなかろうか」としながら博物館の活動は「部分は独立した要素ではなく、全体の構成、或いは関係によって、その位置、性質が規定されていくと見る考え」としている。

このような議論に対しては、その後はこの議論を否定するような意見は発表されておらず、理論的にはほぼ決着がついたと結論してよいと考えられる。しかし実際の博物館現場では、予算あるいは人的な

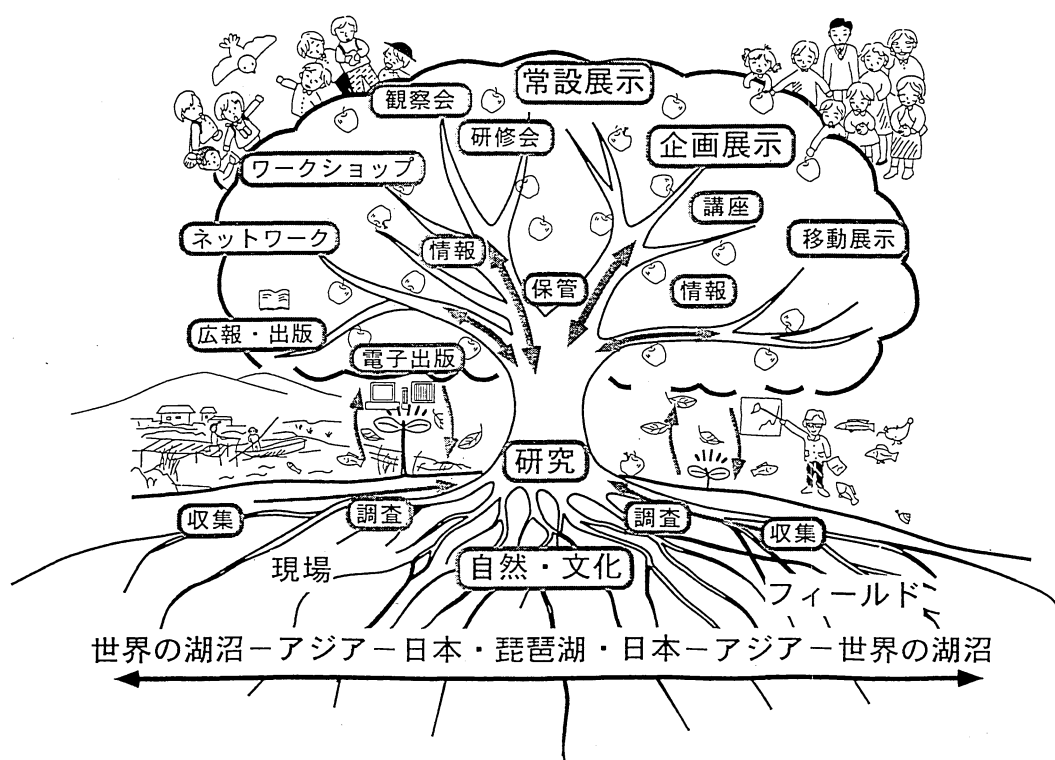


図 琵琶湖博物館の活動イメージ

制約が大きく、事業の位置付けは必ずしもその議論を实践するような方向では行われていない。これは今後の現実の博物館界での大きな課題である。

以上のような議論を踏まえて、琵琶湖博物館では博物館の事業がすべてからまりあい、相互に関係して初めて成立するものであるという立場でそのような活動様式を実践したいと考えてきた。

すなわち、博物館の研究が成果をあげれば、その成果を展示や日常の活動の中で活かす事ができ、逆に新しい研究が行われなければ、情報を発信して博物館利用者を引きつける事ができない。博物館の事業に人が集まり、博物館をとりまく人のネットワークができれば、その事によって資料が集まり、また新しい研究に対するアイデア等もあらわれてくる。その結果としてさらに新しい人をまきこんだ研究が始まり、その成果を発信する事でさらに大きな人の輪と展示の更新や資料の収集につながっていく。博物館の日常活動はこの様にそれぞれの事業がすべて

相互に関連して行われる事で全体が進んでいくような発展をしていくものである。

図（琵琶湖博物館、1996）は博物館の活動イメージを絵に描いたものである。博物館というものを何かにたとえたとすれば、それは大きな1本の樹木のようなものであろう。樹木が地下に広くかつ深くに大きな根を広げて、大地から栄養分や水分を吸い上げているように、博物館も基本の活動として目立たないところで研究調査をし、資料を収集する事業を行っている。そしてその成果は太い幹に蓄えられ、成果の一部は情報というパイプを通して枝葉に運ばれ、結果として実を結ぶ事ができる。博物館を利用する大多数の人達がまず手にする展示や観覧会等の事業は、いわばこの様な樹木の果実であって、果実が宙に浮かんでいるわけではない。あくまでも地下の根を含む樹木全体があつての果実であるように、博物館の活動も研究調査、交流サービス、情報、資料収集整理、展示、の各事業がすべて行なわれるこ

とで、ひとつの博物館というものが成立する。

この図では博物館の活動が1本の流れとしか表現されていないが、落葉や落枝が地表に落ちて、やがてそれが分解されてその樹木の養分になるという、生物としての自己施肥系ということを含めば、博物館の活動が相互にからまりあって総合的に行われているというイメージは完結するであろう。なお、付け加えるならば、琵琶湖博物館では従来の博物館の四つの仕事を、用語と順番を入れ替えて、先にも上げた、研究調査、交流サービス、情報、資料整備、展示という五つの事業として位置付けを行っている。

参加型という博物館の運営方針は、上記のような博物館の事業の在り方とセットになった考えであり、全ての博物館事業を関連させながら進めていくという事業形態と結びついている。即ち博物館の利用者は、展示を利用し、観察会などの事業やワークショップに参加し、やがて友の会や同好会などを通じて研究事業にも参加し、その過程では資料収集にも協力をしてくれる事になる。このように博物館利用者は博物館の全ての事業に係わって、博物館を利用するのであり、博物館側はそのような多くの人々に対して、あらゆる分野での利用を受入れる事が求められ、またその受入れによって、博物館活動はより活発になり、発展をしていくものである。従って、当然の事として、利用者の声を受入れる事ですべての活動を総合的に行うという活動形態を取らざるをえない。そしてその利用を参加型と位置付けた運営を行うとすれば、展示だけではなく、利用するすべての博物館事業がすべて参加型で行われるような運営を行うことが必要である。

一部の事業のみを参加型で行うということも一時的には考えられるであろうが、例えば展示に触り、展示室のワークショップに参加できるという参加性、あるいは交流事業で、例えば観察会の受け付けや講師を手伝ってもらい、同時に企画にも参加してもらうとか、発送作業を一緒にするとかいうような参加性は事業として発展性を持ちえず、また参加者の成長にもつながらないため、長く維持する事はむづかしいであろう。参加型博物館のまず第一の要件は事業を総合的に行う事である。

3 第三世代の博物館とは

最近になって第三世代の博物館という用語が使用されるようになった。この用語を初めて使ったのは、竹内順一（1985）であるらしいが、実際には一般化させたのは、諸岡博熊（1990）と伊藤寿朗（1991）である。ところが「第三世代の博物館」を「参加型の博物館」と同じ意味で使おうとしている例がかなりあり、たしかに一見してよく似た内容を含んでいるため、両者の違いを検討しておく事は必要である。

実は同じ用語を使いながら、諸岡と伊藤のいう第三世代の博物館の内容は少しずつ異なっているのである。

諸岡は、第一世代を、欧米の博物館制度を導入し、日本の近代化のため工業化社会の発展に役立たせることを目的とした博物館、第二世代を、学芸員の資格を持った人々が、教育的立場で、館側の都合に観客を従わせる運営を当然と考え、その上、難解な学術的解説を並べたひとりよがりの展示手法をもつ博物館、そして第三世代を、来館者が自由な雰囲気の下、主体的に行動し、自己の持つ情報を館内にある情報にぶっつけて、交流し、そこでなにかを発見し、驚き、喜び、楽しみ、情報を創出するといった文化的欲求の充足で満足できる博物館としている。この第三世代の内容については具体的に書かれていないので分かりにくいですが、同じ文献から、博物館側が既存の知識を教育をするのではなくて、あくまで展示室内での来館者の主体的な活動と情報交換ができるような展示工夫がされている博物館、というニュアンスが強いように思われる。

それに対して伊藤（1991、1993）では、第一世代とは、国宝や天然記念物など、希少価値を持つ資料（宝物）を中心に、その保存を運営の軸とする古典的博物館であり、第二世代とは、資料の価値が多様化すると同時に、その資料の公開を運営の軸とする現在の多くの博物館、第三世代とは、社会の要請に基づいて、必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民の参加・体験を運営の軸とする博物館であるとしている。そして第三世代の博物館は期待概念であり、典型とする博物館はまだないが、部分的には、市民参加の地域共同調査・共同研究、ワークショップの試み、活動のフィールドを明記した条例づくり、紀要の市民への開放などの新しい試

みが各地で行われている、としている。また第三世代とは、参加し体験するという継続的な活用をとおして知的探求心を育てていくことをめざす施設であり、第二世代が、すでに関心を持っている人びとの要求に応えることを軸としているのに対して、第三世代は、関心の薄い人びとをこそ対象に、その自己学習能力を育むことを軸とするところに意味があり、また人びともそれを期待するような博物館という言い方もしている。

伊藤がいう第三世代の博物館も、いくつかの例が上げられているが、その実態は分かりにくい。それは個別の例あるいは自己学習能力を育む、という中身あるいは関連性が明確ではないためである。

例えば現場の博物館の声を集めた文献の中で、望月一樹(1994)は、博物館が行う講演会や学習講座、ワークショップなどの例を上げた後に、「これらの行事は一過性に過ぎないものであって、都市のカルチャーセンターと同等なのである」としたうえで、その克服が博物館の課題であるとしている。内容が正確に伝えられていないような文章ではあるが、博物館の事業がカルチャーセンターと同じという認識こそが問題であると感じる。伊藤のあいまいさと同じく、博物館の事業の関連性こそが博物館事業の根幹にあることであり、それを切り放してしまうと、博物館の特色が見えなくなってしまうのである。

このような意味から、博物館事業ということでは、展示だけではなく、博物館の幾つかの事業にわたって、博物館利用者がかかわる、という点では伊藤のいう第三世代の博物館は、本論でいう参加型の博物館に近いものであるが、くりかえし述べたように、博物館の全ての事業に利用者が参加し、その関連を博物館が総合化することに参加型博物館の本質を見るとすれば、これまで各地で使用されてきた第三世代の博物館という用語はその意味合いがつかみにくい博物館像だといわざるを得ないであろう。

なお、博物館の事業とカルチャーセンターとの違いは、博物館には研究者である学芸員がいて、博物館での研究成果を活かしながら学芸員が総合的に事業全体のアレンジをするという点であると筆者は考えている。

4 参加型事業の例 琵琶湖博物館の事例から

琵琶湖博物館は参加型博物館として運営をすることを目指してその建設にあたってきた。開館以前の運営計画は、まだその多くが実現しておらず、現在も琵琶湖博物館が参加型で運営をされているといえる状態ではないが、今後の計画を含めてその個別の例を事業ごとに見てみたい。

1) 研究調査事業

琵琶湖博物館では研究調査において、プロの研究とシロウトの研究とを両立させるべきであると考えてきた。シロウトとはいわゆるアマチュアの利用者のことではなく、あくまで一般の博物館利用者が身近にある情報を寄せ合って、解析をし、新しい成果をあげていくという研究のスタイルのことである。内部的には身近な環境調査とよんでおり、環境庁や市町村などで行われている調査と類似しているが、あくまで研究事業として位置付けている事と、テーマによっては組織化をはかろうとしていること、内容的には生物などの単独調査だけではなく、くらしと環境にかかわる部分を関連させるという視点で取り組んでいる点が異なるところであろう。琵琶湖博物館では開館の数年前からこのような調査を毎年いくつかのテーマで取り組んできた。

例えば「水環境カルテ」とよばれる調査が継続して行われている。およそ30年前まで続いてきた水利用について、集落ごとに調査員が現場でヒアリング調査を行い、同時に現在の水利用と比較しながらスケッチや写真とともに記録をしていくという調査で、調査者は自分の集落や少しずつ遠くの集落へと調査地を広げていく。調査者はこれまでの調査参加者の口コミのネットワークで広がっていき、現在では100人を越える調査者がいる。調査結果は地域ごとにまとめながら、整理し、展示室内には地図や写真とともにマルチメディアの手法でディスプレイ上で見る事ができるようになっている。また調査者の報告会を開きながら、さらに調査を続け、滋賀県内の全集落の調査を目標にしている。また調査結果を印刷物として調査者に配布し、調査参加者は全県での結果を比較することで、改めて自分が住む地域について考える機会を作ることを意図している。

この調査の場合には、調査の主体は一般の地域住民であり、マニュアルにしたがって調査をし、自分の知った調査結果と他の地域の結果とを比較的に見る事で自分の地域を見直すきっかけともなっており、身近な水環境について、さらに関心を深め、自分でもっと他の地域の調査をし、また異なる分野についても関心を持ち、調査にも参加するようになっていく。そして結果として滋賀県内での近年の水利用の変遷とそれに伴うくらしの変化を示すという大きな成果をあげることができた。

これに対して例えばタンポポやカタツムリ、アオマツムシなどの生物を中心とした参加型調査では、数千人という多くの参加者があり県内の分布地図や暮しとの係わりなどについての興味深い調査結果を得る事ができたが、多くの人からの情報を得たいという調査の性格上、情報整理についての参加や調査参加者の組織化まではできておらず、その点が大きな課題である。今のところはすべての参加者に中間的な報告書を送付すると同時に、それぞれ次回の調査の際には参加依頼書を送るようにしてきた。そしてこの成果は展示室内で公表し、印刷物等としても活用しようとしてきた。

2) 交流サービス事業

日常の野外観察会やシンポジウムなどの際には、その受け付けや裏方の仕事を顔見知りの参加者の人にボランティア的に依頼し、引き受けていただいている。このようなボランティア活動の動きは進み始めているが、まだ組織化はしていない。このような活動の一つとしてフィールドレポーター制度を発足させた。

フィールドレポーターは、定期的な情報提供者のことで、年4回の博物館からの調査事項とあと数回の自由な観察結果を博物館に報告してもらい、その結果をまとめて展示室に発表したり、フィールドレポーター間のニュースレターを作成して報告したりという活動を行っている。今年度は、ツバメ、水の利用量、セイタカアワダチソウ、などを課題として、それぞれの課題の中では「かならず調査」と「できたら調査」という名前とにわけて、できる範囲で調査を行ってもらっている。

もともとこの制度は、展示室に県内のリアルタイムの自然やくらし情報を掲示しようとして計画したもので、現在行っている文字情報を寄せていただくほか、将来はデジタルカメラで撮影した映像をパソコン通信を通して博物館に送ってもらい、展示室内のディスプレイで見ることができるようにして、県内各地の気象や自然、行事などの情報をリアルタイムで見ること、自分のくらし地域と比較的に見ながら関心を深める人を増やすことを目的としている。

今の所は封筒の発送の作業などはボランティアで作業をしていただいているが、資料類の製作は博物館側で行っている。時間をかけて参加者がもう少し中心になって組織を運営する事ができるようになれば、参加型として十分な活動スタイルとなると思われる。

なお、琵琶湖博物館ではこのような情報の報告やボランティア的な活動は、あくまで博物館という場を活用した博物館利用者の活動と位置付けて、交流サービスの事業に含めている。

3) 情報事業

琵琶湖博物館の準備室では、その初期の時点から新しいコミュニケーション手段としてパソコン通信に注目してきた。文字による情報交換と同時に、家庭にいて博物館の資料を見ることができるよう、画像情報をパソコン通信で送ることができるようシステムを想定して準備に取り組んでいた。計画が動きだした時点で、滋賀県内の民間のパソコン通信ホスト局のお世話を受けて、専用ボードを作らせていただくことができ、しばらくの間はそこでいわば練習を行い、その後は独自のネットを構築して内部を中心とした活用を行ってきた。

民間のネットを利用させてもらっていた時代を通して、いわゆる参加型の調査などにおいてもパソコン通信を活用すると、利用することのできる人の範囲は限られているものの、リアルタイムで情報の交換ができ、またその性格上、制約にとらわれず自由に意見を書くことができるという利点は、他の情報交換の手段と組み合わせることで大きな成果を得ることができるといことがわかっていく。

現在の計画では、パソコン通信で文字情報のやりとりを、インターネットで画像情報と文字情報を組合わせて、博物館を中心とした情報のネットワークを作り上げていくことにしている。ハード的には準備はほぼ整っており、画像情報の発信についてもかなりのところまで準備が終わっている。今は日常の情報のやり取りに関して、博物館側からの情報を発信していくための担当者の確保などの問題が残されているが、近く可能な範囲から、公開していく予定である。

博物館が文字通りのコミュニケーションの場となり、博物館からの情報を活用しながら、博物館に対して自由に意見をいい、質問をし、また博物館の利用者どうしが自由に意見を交換することができる状態を日常的に作ることで、博物館側からすれば利用者の声を日常的に取入れ、また声をいかした活動を行うことができる。なお、展示室内でこのネットにつないで意見を書き込むという構想は博物館準備室の初期段階では計画があったが、今は具体的な計画は動いていない。

4) 資料整備事業

琵琶湖博物館の情報事業の中では、静止画と動画を含めて画像情報を集め、博物館情報システムにのせて活用するという計画がある。そのため例えば静止画の場合、およそ10万枚程度を収集し、その半分ほどをCD-ROMに入力を終えている。

これらの写真は最近のさまざまなテーマの写真とともに、昭和30年代ころを中心とした滋賀県の古い時代の写真を集中的に収集しており、その収集は人のネットワークを通じて、収集を心がけてきた。県の広報などを通じてよびかければ多くの写真収集ができる可能性は高いが、写真そのものよりも写真を撮影した人、あるいは家族の方々などの声を同時に収集していくという手法を取るためには、人のネットワークの幅を広げながら収集をしていくという方法が現実的であり、後に残る効果も大きいと考えられる。

特に古い時代の写真は、集合写真や記念写真などが多く、普通の人の暮らしを撮影した写真はなかなか見られないが、そういう写真は単に写っている情景だけではなく、その時代のその場を思い出すことで、その時代の暮らしぶりや民具類、人との

付き合い、家族など全てのことを含んだ記憶が撮影されていることになるため、博物館としては非常に貴重な物と考えているが、一般的にはそういう写真は個人的なもので、価値のないものと考えられている。

古い写真には大きな意味がある、という立場での写真展示の開催や、日常の活動の中でのアピールを見て、そういう価値の有るものならば、と提供してくれる人が少しずつ現われてくるのである。写真を預かり、できる限りは複写をさせていただいて、写っている写真の内容について、できるだけ詳しく記憶をたどっていただいて、記録をする、そういう事業の積み重ねの中から、現在のくらしと環境を見つめるための多くの材料が生まれてくるのである。このようにして入手できた写真は、展示や出版、情報としての写真提供などの手段を通して、多くの人に利用をしていただくことができる。

この写真の例のように、できる限り人のネットワークを通じて写真を提供してもらい、その利用をはかるという方法は利用者あるいは博物館支持者の人々の活動にかかっている。もちろん一般的な博物館資料の収集に、多くの利用者の情報や実際の提供に負うところが多いということは、博物館として当然のことである。

5) 展示事業

展示は博物館にとっての顔であるといわれ、利用者にとってはまずその博物館を判断する第一印象の場となる。そのため展示を楽しく親しみやすいものとすることは大切なことである。

琵琶湖博物館では展示を、屋外に存在する自然や人の暮らしに目を向けるきっかけを作る場と位置付けて、来館者と展示との間にできるかぎり精神的な壁をつくらないようにするため、可能な限り露出展示をこころがけた。できるだけ身近な日常の話題から展示を始め、地元のテーマや資料を使い、また展示ができてくる過程などをそのまま展示してしまうことで、野外と展示をつないでいくような工夫をしたつもりである。このような中で来館者は、展示を堅苦しい場ではなく、ごく身近ななかに発見を感じる楽しい場と感ずることができ、また展示にもマルチメディアの手法を

使って、本人の写真とともにその人の意見を音声で示したり、あるいは地域の環境に関わる活動をポスターで展示するなど、利用者が展示づくりにかかわっていること自体を展示で示すようなことを意識して行なった。

身近な話題を提供しながら、たとえば「環境」について考えるための材料を展示し、また参加型で行なった調査の結果を展示して、その内容や環境に関して自分の意見を書いてもらう場を作り、またその意見を掲示して読めるようにすることで、その意見を読んでまた自分の意見を書き残す、その内容をコンピューターに入力して、展示としても活用し、また博物館の展示の更新のための材料にもする、というような来館者の意見のくみ上げを行なうようにしている。

また学芸員が毎日展示室内で話をするフロアートの開催や、学芸員と司書が常駐する図書室内の質問コーナーの設置、展示室内への案内スタッフの配置などを通じて、人へ対応できる場を設け、来館者の相談相手であり、話し相手であるような博物館展示を目指している。

5 博物館が参加型であるための条件

これまでの我が国の博物館学の中では利用者の視点での議論が弱かった事はすでに述べたとうりであるが、最近になって、利用者の立場から見た博物館利用についての議論が紹介された。「博物館体験」という出版物の中でジョン・フォーク・他（1996）は、人びとが博物館に来るのは楽しみのため、勉強しようと思って来るわけではない、しかし楽しみの中でこそ人間は学ぶ、と主張している。

この主張は非常に博物館にとって刺激的な議論である。これまで博物館に関する議論の中では、博物館を訪れるということは、利用者の意思であるということが前提にあって、その利用者をいかに楽しませるか、というようなことは考えていなかったと思う。いかにして教え、伝え、事業に巻き込むか、ということが主題であって、いかにして楽しませるか、ということは博物館らしくないと考えられてきたのではない。しかしながら多くの人が、まず博物館に来て、博物館という場に親しみ、博物館を利用してもらうことが先決である。今はこの「楽しさ」と

いうこと検証しておく事が必要であろう。

現在社会は楽しさのあふれた社会といえる。テーマパークやイベント、映画、ビデオ、あげだせばきりが無いほどに楽しさがある中で、なぜ人は博物館にくるのか、そこでどのような楽しさを求めているのだろうか、ということを考えておく事は重要であろう。人が楽しむということについては幾つかの議論がある。例えば角野幸博（1976）は、現在社会は、与えられた情報を反すうし、自分の知識や意見を加えて、他人に蘊蓄を傾けて楽しむ人が増え、モノに付随する情報が尊ばれるという、そして博物館は「受け手の知識量に応じて、受け取る情報は深みを増す。そして受け取った情報は自分の解釈を加えて誰かに披露したくなる。そこは、人々の知的好奇心をくすぐり、楽しみながら披露し、刺激を与え合う場なのである」という。そして博物館では、そのような楽しみ方をする人達に対して、必要なアドバイスをすることで、人はさらに新たな好奇心をふくらませる事ができるであろう。

また人が集まるための要件として、仁木 稔（1996）は、1）ハレの場としての祝祭性 2）見世物的楽しさを演出したオリジナルな娯楽性 3）人間の好奇心を刺激する新奇性と先端性 4）その時、その場でしかあじわえない臨場感、生の感動、ライブ性、という四つの点をあげている。これらの要件も博物館という場が本質的に持っている内容であり、運営上で少しの注意をはらえば、すぐに実現できるような条件ばかりといってよいだろう。博物館という場はこのようにまず人が集まる場としての条件を備えているのである。

さらにあげるなら、人が集まり、楽しむことの理由として、古典的な議論として、マズローの欲求の五段階説が上げられよう。第1段階、生理的欲求 第2段階 安全の欲求 第3段階 帰属の欲求 第4段階 承認の欲求 第5段階 自己実現の欲求である。第3段階までのような基本的な欲求がかなえられた後は、利用者が主人公として認められ、さらに自己実現をなしとげることで満足感を得る事ができる、とされている。博物館においても、利用者の満足を得るためには、単なる展示見学だけで終わらず、博物館利用のあらゆる局面で第4段階、第5段階の欲求が満たされるような参加形態を準備してお

く必要がある。

以上のような幾つかの議論からも、人はどのような楽しみを求めているのか、そして何を求めて博物館にやってくるかは明らかになってくる。人は学ぶ楽しさを求めて博物館にくるのであり、その楽しさの中心は自分が主体となって、自分からも情報を発信し、人と交流をするということである。博物館という場を利用して主体的に考え、博物館の情報を受け取ることで好奇心を伸ばし、活動に参加していくことで自分の世界を広げていく。博物館こそ、そのような楽しみ方をするのに最も適した場である。そして博物館という場を楽しむためには、博物館の側は、本稿で参加型とよんでいるような運営方針を持つことが必要とされる。

以上のような議論を整理すると、博物館が参加型の博物館として運営されるためには、1) 利用者は博物館が行う全ての事業分野への参加とともに運営への発言ができること、2) 自分が主体となるかたちでの参加ができること、3) 参加することで新たな好奇心が発揮され、関心を広げていくような発展性があること、という三つの条件が必要であると考ええる。

1) は博物館の利用者にはあらゆる年齢、階層、興味の段階があり、それらの人々を基本的にはすべて受入れて、かつ一定の満足感を得てもらうということが博物館事業の必須条件であるということが前提である。そのような多様な人々が希望する博物館の利用に対して、博物館の事業のどの分野においても関心を持った分野で参加する余地を作っておき、参加の窓口を持って受入れることが必要であろう。また単に既存のメニューにのるだけではなく、運営内容に意見をだし、その意見が受入れられる状態を保つようにしておかなければ、利用者として満足感を得る事ができず、利用が一時的なものとなってしまふ。

琵琶湖博物館の例で言えば、基本的な運営方針を持つと同時に、多面的な内容を含んだ計画的な事業展開やその際の参加者からの意見のくみ上げ、パソコン通信を使つての情報交換、博物館や展示に対する意見が展示室内で掲示されるシステムなどにあらわれている。

2) は参加する利用者が、自己の参加意識を満足

させるためには、博物館利用の局面で利用者が中心となり、自分の意見を発信することができるような運営方式を持つことで利用者が自分で作りだしているという意識を持てるようにすることである。博物館からの情報を受入れるだけではなく、それを切っ掛けとして自分から情報を発信し、ある場面では博物館の事業を中心になって運営するようなこともありうるであろう。

実例としては、参加型調査においても情報を得た後の中間報告の発行や参加者の会議を持ち、意見をもらい、それらを出版すること、日常の事業においても参加者が直接発言できる場を設定すること、事業参加者の同窓会的グループの組織化と博物館内への受入れ、研究希望者の受入れと日常対応、などにあらわれているといえるだろう。

3) はそのような利用をすることで知的好奇心が刺激され、更に高度な利用を行うようなシステムが作られていることが必要であろう。なにかきっかけがあつて野外観察会に参加した人が、興味をもつてもっと調べたい、と考えた時に、それを可能にするプログラムや組織が博物館に確保されているという状態が求められる。それは、学芸員という研究者が全体の計画を作り、事業を単発ではなく、計画的にプログラムや内容の吟味をしながら行なっていることによるであろう。

博物館の例では、博物館友の会、同好会や研究会の組織化、民間のグループなどへの協力、出版物の充実、学芸員による研究成果の活用など、さまざまな段階での窓口の存在があげられる。

内容的には、1) は組織的な受入れ整備であり、2) はプログラムと実際の運営姿勢であり、3) は利用者へのフォローと博物館事業全体の発展が前提となる。そしてこのようなプログラムや技術的な展開と同時に、現実には学芸員がそういう姿勢をあらゆる事業において意識して貫くという姿勢を持続けることが不可欠である。

このような運営方針を持つことで、利用者の幅広い参加意識を十分に受入れ、かつ満足してもらうことでさらに次の参加につなげ、その結果として博物館自体が利用されることで成長発展していくような博物館を「参加型博物館」とよびたい。

6 むすび

比較的広く使用されるようになってきた参加型博物館という概念は、その定義が明確にされる以前に使用されるようになり、用語としても混乱が見られるため、参加型博物館とはどのような内容の運営をする博物館であるのかを考察した。

参加型の博物館とは、その事業が総合的に行われ、どの事業に対しても主体的に参加ができるような体制をもった博物館ということがいえそうである。そのような博物館の運営は、かならずしも最近になってあらわれた博物館像ではなく、部分的には博物館としては普通の運営スタイルであったり、あるいは理論的にはむしろ解決済みであったりするような内容をすら含んでいる。しかしながらかつて、伊藤が第三世代の博物館を概念の博物館であるといったと同様に、現在も参加型の博物館といえる博物館はまだ日本には生まれていないのではないと思われる。琵琶湖博物館をはじめ各地の博物館の多くは、運営理念として参加型を目指しており、今後の実践の中で参加型博物館といえる博物館が誕生することを強く望みたい。

引用文献

- 新井重三 (1973) 博物館における「研究」の性格と機能的に見た博物館の分類、博物館研究：45 (2) 1-20
- 琵琶湖博物館 (1996) 活動方針、要覧 滋賀県立琵琶湖博物館：3-4
- 千地万造 (1978) 博物館における調査・研究：調査・研究と資料の収集、博物館学講座5：雄山閣出版：3-52
- 浜口哲一・小島弘義 (1977) 地域博物館における学芸員と特別展、博物館学雑誌：2 (1・2) 1-14
- 浜口哲一 (1996) 行事の企画と運営、ミュージアムマネジメント、東京堂出版：221-227
- 伊藤寿朗 (1993) 市民の中の博物館、吉川弘文館：190 pp
- 伊藤寿朗 (1991) ひらけ博物館、岩波ブックレット、No.188：68 pp
- ジョン・フォーク、リン・ディアーキング (高橋順一・訳) (1996) 博物館体験 学芸員のための視点、雄山閣出版：215 pp
- 角野幸博 (1996) まちづくりと文化施設、ミュージアムマネジメント、東京堂出版：32-36
- 角野幸博 (1996) 遊び場としての商業空間、都市のたくらみ 都市の愉しみ、日本放送出版協会：101-138
- 加藤有次 (1977) 博物館学序論、雄山閣出版：263 pp
- 加藤有次・椎名仙卓 (1990) 博物館ハンドブック、雄山閣出版：337 pp
- 倉田公裕 (1979) 博物館学、東京堂出版：290 pp
- 倉田公裕・矢島國雄 (1997) 新編博物館学、東京堂出版：408 pp
- 望月一樹 (1994) 学び合う 講演会・学習講座・ワークショップ、美術館・博物館は「いま」、現場からの報告24篇：日外アソシエーツ 日外教養選書：175-183
- 諸岡博熊 (1990) 変革する博物館第三世代、創元社：494 pp
- 仁木 稔 (1996) 都市の愉しみ 都市のたくらみ、都市のたくらみ 都市の愉しみ、日本放送出版協会：155-179
- 布村 昇 (1980) 博物館のマスコミュニケーションとカスタムコミュニケーション、博物館学雑誌：5 (2) 19-21
- 大堀 哲 (1997) 博物館学教程、東京堂出版：344 pp
- 大村和男 (1994) 弥生時代にタイムスリップ 静岡市立登呂博物館 参加体験型ミュージアムへの改装、Museum Data：(24) 1-4
- 高田公理 (1996) 生活とエンタテインメント、ミュージアムマネジメント、東京堂出版：90-94
- 高井芳昭 (1988) 博物館における体験学習について 歴史系博物館の体験学習室を中心に、博物館学雑誌：13 (1・2) 7-18
- 竹内順一 (1985) 第三世代の博物館、冬晴春華論叢：(3)*
- 榊原聖文 (1992) もう一つの博物館学を求めて、博物館学雑誌：17 (1・2) 9-24
- 柴田勝重 (1997) 科学技術と環境教育の融合の場を目指して、望星：28 (6) 54-60

*は実見していない